かごしま ドクター便り

子宮がんの後遺症軽減

縮小・妊孕性温存手術

今回は子宮がんの後遺症を減らす縮小手術や、妊娠できる能力を残す妊孕性温存手術について説明します。

通常、子宮頸がんと体がんの手術では「郭清」と呼ぶリンパ節の徹底的摘出が行われますが、早期の段階では、リンパ節への転移はほとんどありません。郭清のためリンパ流が悪くなって下肢にむくみ（リンパ浮腫）をきたすと、感染を起こしやすくなり、日常生活は大きく制限されます。見かけ上の問題も、女性としては悲しいことです。

そのため早期の頸がん、体がん手術では、リンパ節摘出を省略する「縮小手術」への期待が高まっています。がんの原発巣から最初にリンパ流が到達する「センチネルリンパ節」に転移が認められなければ、他のリンパ節への転移もないと考えられます。手術中にセンチネルリンパ節への転移がないと分かった場合、郭清せずリンパ節の大部分を残せば、下肢リンパ浮腫は、ほぼ起きなくなります。

頸がん、体がんへの保険適応はまだですが、海外では広く普及しています。国内でも鹿児島大学病院をはじめ、複数の婦人科がん専門施設で臨床試験が行われています。

妊孕性温存手術は、頸がんの若年化に伴い、未出産の女性が子宮を失い妊娠できなくなる悲劇を減らそうとするものです。鹿大病院では、病巣のある子宮頸部を、周囲を含めて根治的に切除し、残った子宮と腟を吻合して妊娠可能な子宮を再建する「広汎子宮頸部摘出術」を行っています。

現在、国内の50を超える施設で行われ、既に多くの患者さんが妊娠出産しました。しかし術後は妊娠しにくいばかりか、妊娠しても早産しやすく、分娩は帝王切開となります。大変な面も多いので、頸がんにならないに越したことはありません。鹿大病院では手術の傷を小さくして妊娠率も高めようと、前回紹介したロボットで行う臨床試験も始めています。（鹿児島大学病院産科婦人科教授・小林裕明）

◆第1・3水曜掲載。